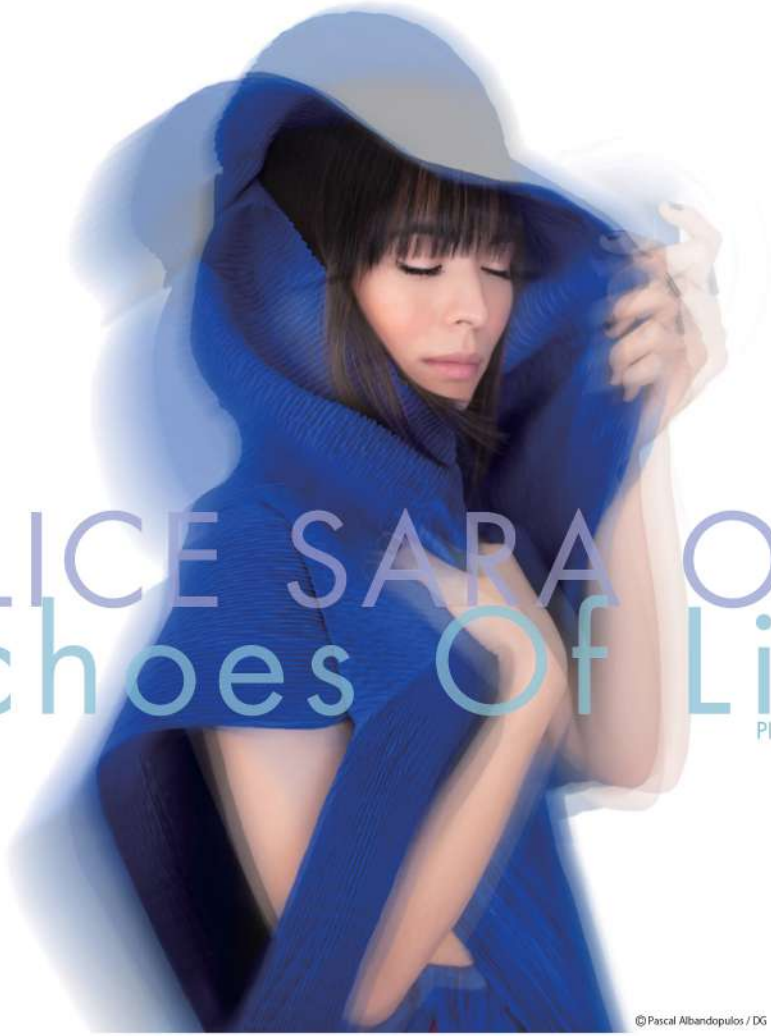

アリス=紗良・オット

2022年5月30日（月）19:00開演
サントリーホール
7:00p.m. Monday, May 30, 2022 at Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ　協賛：MEDIHEAL　協力：ユニバーサル ミュージック

ECHOES OF LIFE
エコーズ・オヴ・ライフ

アリス=紗良・オット（ピアノ）
Alice Sara Ott, Piano
ハカン・デミレル（建築家、デジタル・アート・インスタレーション）
Hakan Demirel, Architect /Digital Art Installation

PROGRAM

イン・ザ・ビギニング・ワズ ***IN THE BEGINNING WAS***
フランチェスコ・トリスターノ(1981-)：イン・ザ・ビギニング・ワズ
Francesco Tristano: In The Beginning Was

フレデリック・ショパン(1810-1849)：24の前奏曲 作品28より
Frederic Chopin: Preludes Op.28

第1番 ハ長調	Agitato
第2番 イ短調	Lento
第3番 ト長調	Vivace
第4番 ホ短調	Largo

インファント・レベリオン ***INFANT REBELLION***
ジェルジュ・リゲティ(1923-2006)：ムジカ・リチェルカータ 第1曲
György Ligeti: Musica Ricercata, I. Sostenuto

フレデリック・ショパン(1810-1849)：24の前奏曲 作品28より
Frederic Chopin: Preludes Op.28

第5番 ニ長調	Allegro molto
第6番 ロ短調	Lento assai
第7番 イ長調	Andantino
第8番 嬰ヘ短調	Molto agitato
第9番 ホ長調	Largo

ウェン・ザ・グラス・ワズ・グリーナー ***WHEN THE GRASS WAS GREENER***
ニーノ・ロータ(1911-1979)：ワルツ
Nino Rota: Valse

フレデリック・ショパン(1810-1849)：24の前奏曲 作品28より
Frederic Chopin: Preludes Op.28

第10番 嬰ハ短調	Allegro molto
第11番 ロ長調	Vivace
第12番 嬰ト短調	Presto
第13番 嬰ヘ長調	Lento
第14番 変ホ短調	Allegro
第15番 変ニ長調	Sostenuto

ノー・ロードマップ・トゥ・アダルトフッド ***NO ROADMAP TO ADULTHOOD***
チリー・ゴンザレス(1972-)：前奏曲 嬰ハ長調
Chilly Gonzales: Prelude in C Sharp Major

フレデリック・ショパン(1810-1849)：24の前奏曲 作品28より
Frederic Chopin: Preludes Op.28

第16番 変ロ短調	Presto con fuoco
第17番 変イ長調	Allegretto
第18番 ヘ短調	Allegro molto

アイデンティティ ***IDENTITY***
武満 徹(1930-1996)：リタニ 第1曲
Toru Takemitsu: Litany I. Adagio

フレデリック・ショパン(1810-1849)：24の前奏曲 作品28より
Frederic Chopin: Preludes Op.28

第19番 変ホ長調	Vivace
第20番 ハ短調	Largo

ア・パス・トゥ・ウェア ***A PATH TO WHERE***
アルヴォ・ペルト(1935-)：アリーナのために
Arvo Pärt: Für Alina

フレデリック・ショパン(1810-1849)：24の前奏曲 作品28より
Frederic Chopin: Preludes Op.28

第21番 変ロ長調	Cantabile
第22番 ト短調	Molto agitato
第23番 ヘ長調	Moderato
第24番 ニ短調	Allegro appassionato

ララバイ・トゥ・エターニティ ***LULLABY TO ETERNITY***
アリス=紗良・オット(1988-)：ララバイ・トゥ・エターニティ
（モーツァルト：《レクイエム》“ラクリモーサ”より）
Alice Sara Ott: Lullaby To Eternity (on fragments of W.A.Mozart's “Lacrimosa”)

CREDITS

Production manager for live performances: Clemens Malinowski
Production: 19:4 Architects Team
Stars (Night): Ahmet Dogu Ipek, (125cm x 360cm, Indian ink and jags on cotton paper, 2017)
Courtesy of Vehbi Koc Foundation Contemporary Art Collection, Istanbul
Dress designed by Sonia Trinkl

PROFILES

©Pascal Albandopulos / DG

アリス＝紗良・オット（ピアノ） Alice Sara Ott, Piano

クラシック音楽界の中で、最も独創的精神の持ち主のひとりであるアリス＝紗良・オットは、「エコーズ・オヴ・ライフ」のアルバムのリリースと共に、そのアルバムの世界ツアーで2021/22シーズンを開幕した。ドイツ・グラモフォンの専属アーティストであるオットにとって、今回のプロジェクトは10枚目の最新アルバムとなる。

「エコーズ・オヴ・ライフ」は、ショパンの「24の前奏曲」を中心に、リゲティ、ロータ、チリー・ゴンザレス、武満徹、ペルト、トリスターノ、そしてオット自身による7つの曲を織り込んだ、アリスの足跡を辿る個人的なアルバムである。建築家デミレルとのコラボレーションは、リサイタルに随伴するデジタル・ビデオ・インスタレーションを生み出し、聴衆をそれぞれの仮想の旅に連れ出し、独自のコンサート体験を作り出す役割を果たしている。

このプロジェクトは2021年11月にロンドンで世界初演が行われ、その後パリ、ミュンヘン、ルツェルン、ブダペスト、ルール・ピアノフェスティバル等と続き、2022年の春には日本でもツアーが行われる。「エコーズ・オヴ・ライフ」は、「ナイトフォール」、「ワンダーランド」、「ザ・ショパン・プロジェクト」といった発展性のあるアルバムの結果として生じたものであり、アルバムの総ストリーミング数は1億5千万回を超える。

2021/22シーズンは、ハーン指揮ボルサン・フィル、エッシェンバッハ指揮ＫＢＳ響、ルルー指揮カメラータ・ザルツブルクと共演する。M.フランク指揮フランス放送フィルとのツアーでは、ラヴェルの左手のための協奏曲を演奏する。

アリス＝紗良・オットはこれまでにドゥダメル、エラス=カサド、ロウヴァリ、P.ヤルヴィ、パッパーノ、ノセダ、オロスコ＝エストラーダ、テミルカーノフ、アシュケナージ、ミョンフン等の名指揮者と共演している。オーケストラでは、ベルリン・フィル、ロサンゼルス・フィル、ロンドン響、フィルハーモニア管、ミュンヘン・フィル、シカゴ響、ウィーン響等と共演を重ねている。

才能あるイラストレーターとデザイナーでもあるオットは、ドイツの高級ファッション・ブランドJOSTのためにバッグの代表的なラインを生み出した。また、Technicsのグローバル・ブランド・アンバサダーに起用され、LVMHグループであるフランスのラグジュアリーブランド「Chaumet（ショーメ）」とのコラボレーションも行っている。

ハカン・デミレル（建築家） Hakan Demirel, Architect

1983年マラティヤ生まれ。キャリアを通じて国内外のコンクールでの受賞歴があり、2011年にはヨーロッパ建築アートデザイン都市研究センターに表彰され、シカゴ・アテナイオン建築・デザイン博物館の“40アンダー40”に最も優れた建築家の一人として選出された。2014年には、世界の5人の建築家に贈られるアーキテクチャー＋デザイン&セラ・アワーズで、トルコの“ベスト・ヤング・アーキテクト”と同時に“黄金の新進建築家たち”の2部門を受賞。

ハカン・デミレルは2007年から2008年にかけてニューヨーク在住、帰国後、アリフ・スワバトマズとパートナーシップを結び、スワバトマズ・デミレル・アーキテクツを設立。後に“19:4 Architects”とコード化した名のもとにイスタンブールとチューリッヒを拠点として活動している。

PROGRAM NOTES

ALICE SARA OTT
Echoes Of Life
PIANO RECITAL

エコーズ・オヴ・ライフ

『エコーズ・オヴ・ライフ』は、私の人生に影響を与えている考えや個人的な瞬間を反映しているだけでなく、今日のクラシックの音楽家としての自分の役割や、どのように芸術的な視野を広げて行きたいかを描いた音楽と映像による旅です。

芸術的な表現ができて、他の芸術様式ともつながることができるものとその可能性に、常に魅了されてきました。このプロジェクトで、私は、音楽と建築の世界を融合させるという、長年の夢を実現させました。建築家ハカン・デミレルとのコラボレーションが、『エコーズ・オヴ・ライフ』に物理的な次元と視覚的な物語を与えています。ハカンとは互いの作品に大きな敬意を抱きあっていましたが、最初に出会った時、実際に、私たちの2つの芸術形式をどのようにつなぐことができるのか、想像がつきませんでした。何度も長い時間をかけて話し合い、真剣に考えやアイディアの交換をして、ようやく共通のビジョンと夢が形を成してきました。

このプログラムでは、音楽とともに、ハカンが物語に建築的な要素を反映させるためにデザインしたデジタル・ビデオ・インスタレーションが上映されます。それは音という変化する有機体とともに存在し、息づき、『エコーズ・オヴ・ライフ』の小宇宙を巡るバーチャルな旅へと誘ってくれます。

私は幼い頃から、クラシック音楽の膨大な遺産を学んで習得し、伝統的な演奏方法を守ることを最優先とする音楽教育を受けて育ちました。先生方が与えてくださった厳格な規律には色々な意味で感謝する一方で、また長年、同じ価値観を大切にして過ごしてもきましたが、そこには、現代の文脈に沿ってクラシック音楽を探究するという余地はほとんどなく、またそれは奨励されてもいないのだということに気づきました。

音楽は、私にとって、人間同士がシェアすることのできる、最も親密で、正直で力強い表現方法のひとつです。クラシック音楽の遺産と豊かさに対しては常にその真価を認め、情熱を注いでいますが、一定の教育や形式を守ることへの期待が、不自然な独占や排他性を生み、年代や階級によって隔てられてしまうことも見てきました。

今日のクラシックの音楽家としての私の役割と責任とは、いったい何でしょうか。私が演奏するレパートリーの大半は、何十年、何百年も前に作曲されたものです。私はオリジナル・スコアを変えこそはしませんが、今ここで、この音楽をどう解釈するかの唯一無二の機会を得ているとして、楽譜を読み取ります。

私たちが現在、その音楽を高く評価している作曲家たちについて考えてみると、彼らは常に音楽そのものと、それを取り巻くすべてのものに挑戦し、再定義し、境界線を押し拡げてきました。なぜ、私たちが同じことをしてはいけないのでしょうか？　なぜ、過去の伝統や制約に固執し、あるいは再現するだけで、彼らの音楽と精神を受け継ぎ、先へと推し進めようとしないのでしょうか？

私たちは過去を振り返って、引き継ぐことはできても、それをそのまま再生することはできません。なぜなら、私たちの見る力、考える力、経験する力もまた、現在と結びついているからです。コミュニケーションや消費のスピードが速くなったことで、私たちは、社会的価値観や認識、需要を常に再定義する時代に生きています。その結果、常に分断と孤立の危険にさらされてもいます。音楽は、私たちの結束力を高め、社会的な意識と包容力を促しますが、それはコミュニティの中でしか存在することができません。音楽をどうとらえるか、音楽とどうつながるかということについて、自ら制限してしまってはならないのです。

19世紀まで、プレリュード（前奏曲）は、作品の本編に先立つプロローグや序奏を意味しましたが、フレデリック・ショパンは、24のキャラクター・ピースからなる《24の前奏曲》Op.28を作り上げました。それらは互いに全く異なるものでありながら、一つのまとまりのある作品を形成しています。私は《24の前奏曲》が、全てどこかでつながっている瞬間があつまったような、一連の前奏曲の上に、人生そのものを映し出しているかのように感じます。ある一歩が次の一歩につながり、ある時は速く、ある時は遅く、またある時は円を描くように歩み、行き止まりで引き返さなければならないこともあります。一つの章の終わりは常に次の一章のはじまりとなり、人生においては、時に予期せぬ障害物に出会ってつまずき、新たな見知らぬ道を歩いているかもしれません。

このアルバムのために、私は7つの現代曲を選び、それらをショパンの前奏曲と組み合わせて、私のこれまでの人生を導き、形作ってきた個人的な経験や思考を体現してみました。このアイディアを最初に試みた時、これが私の感情に何をもたらし、音楽的にどのような発見となるのか、はっきりとはつかめませんでしたが、初めてこのコンピレーション・アルバムを通して聴いた時に、ショパンの前奏曲がいかに現代的で、挑発的で、時代を超越したものであるかということを、これらの現代曲が証明していると理解したのです。

私たちは時代とともに変化し、困難を伴いながら社会や環境に向き合っています。考え方や記憶も、時とともに変わります。こういった感覚の変化は、過去から現在、現在から未来へ、常に私たちに伴うものです。新たな形と意味が私たち自身の中で反響し続けます。まるで私たちの生のこだま——エコーズ・オヴ・ライフ——のように。

私の親愛なる友人である作曲家・ピアニストの**フランチェスコ・トリスターノ**がこのプロジェクトのために書き下ろしてくれた《イン・ザ・ビギニング・ワズ》、アーティストの**アーメッド・ドグ・イペック**が提供してくれた「スターズ（夜）」、そしてファッション・デザイナーの**ソニア・トリンクル**が私のために衣装を作ってくれたことに感謝を申し上げます。

アリス＝紗良・オット

イン・ザ・ビギニング・ワズ はじめにあったのは
フランチェスコ・トリスターノ：イン・ザ・ビギニング・ワズ

まだピアノを始める以前の幼い頃、私はジグソー・パズルの、小さなピースが集まるごとに、大きな絵が見えてくるということに夢中になっていました。そしていざ、ピアノを始めた時、最初に好きになった作曲家はヨハン・セバスティアン・バッハでした。私にとってバッハの音楽は、パズルを組み立てるような構造をしているように思えたのです。一つのライン、一つのメロディから始まって、他のものが加わり、様々な形、パターン、そして調性が築かれていく。

このアルバムをどのように始めたいかと考えた時、長い間一緒に音楽を作り、親友というよりも、今や家族のような存在となっているフランチェスコ・トリスターノにメールを書きました。私は、私の人生の初期の頃と響き合うような何かを探していて、バッハの前奏曲ハ長調にインスパイアされたショパンの最初の前奏曲につながるような線を求めているのだと。

フランチェスコは《イン・ザ・ビギニング・ワズ》という題の曲を書いてくれました。この新しい曲は、私たちの時代の精神を表していると感じます。過去を携え、現在を表し、私たちを未来へと運ぶサウンドトラックなのです。

インファント・レベリオン 幼い反乱
ジェルジュ・リゲティ：ムジカ・リチェルカータ 第1曲

私の子供時代において、自分の限界を押し広げて両親の忍耐力に挑戦することは重要な一時でした。

リゲティの《ムジカ・リチェルカータ》の第1曲は、異なるオクターヴや間のたった一つの音で構成されています。この曲から、私は、自分が“No”という言葉を発見した時のことを思い出します——たった一つの音節ですが、私に自立心とパワーを与えてくれた気がしました。限定的な言葉でありながら、無限の表現を持つ言葉です。

私の幼い頃の反抗期は、“No”を“Yes”に置き換えることを学んだ時に終りました。そしてリゲティのこの曲は、最後の一音にだけ、新しい別の音が置かれているのです。

ウェン・ザ・グラス・ワズ・グリーナー 草原がどこまでも青かった頃
ニーノ・ロータ：ワルツ

草原はどこまでも青く
日差しはどこまでも眩しく
どこまでも甘く
不思議に満ちた夜…

ピンク・フロイドの「High Hopes（運命の鐘）」は、10代の頃に大好きだった曲です。まだ私がナイーヴで恐れを知らず、世の中を薔薇色の眼鏡を通して眺め、何事もロマンティックに捉えていた頃の話です。その頃、フェリーニやヴィスコンティの映画と恋に落ち、作曲家ニーノ・ロータの曲を何時間も聴いていました。最近またロータの世界を発見し、あの頃のことを思い出してノスタルジックになりましたが、実は最初に聴いた時、ロータの作品をショパンと間違えたのです。ロータのワルツのメロディや装飾音やスケールが、ショパンの前奏曲と交じり合う雰囲気…。

まるで、最初からそこにあったのではないかと思えるほどです。

ノー・ロードマップ・トゥ・アダルトフッド 道しるべのない大人への旅
チリー・ゴンザレス：前奏曲 嬰ハ長調

20代の初め頃、私はほとんどの時間を旅の空の下で過ごすようになり、それまで行ったことのない国や場所と出会いました。物事の見方も少しずつ変わり、踏み出す一歩一歩が好奇心で満たされていながらも、同時により大きな落ち込みや壁を経験するようにもなりました。失敗やそれに対する恐れというものは避けられないものであると受け入れるようになっていきます。

この時期はまた、自分が育ってきた場所や周りの人々への想いが強まる時でもありましたが、私がそれらから卒業する時を迎えているということも分かっていました。

その頃のことを振り返った時、チリー・ゴンザレスの《前奏曲　嬰ハ長調》が頭に浮かびました。それは、このアルバムの冒頭の音楽にエコーするだけでなく、一つの章の終止符にもなりました。同じ原点を持つものが、今は、別の形を作っています。

アイデンティティ
武満徹：リタニ 第1曲

作曲家の武満徹は、「アイデンティティが明確になる音楽の世界に身を置くことを選んだ」と述べたことがあります。私はこの言葉に共感します。音楽は、私が誰であるかを定義することができる唯一の場所だからです。

私は音楽以外でも、自分が何者であるかを捉え、定義する方法を知っていますが、それはより複雑で、はっきり言えるようになるまで30年近くかかりました。

私のアイデンティティは、国籍にあるわけではありません。父の祖国で、私の生まれた場所、今も住んでいるドイツにもありません。母の母国で、私は住んだことがない日本にもありません。私がネイティブに話すこれら2つの言語にあるわけでもないのです。それは両国の精神性や文化にどう通じてよいかわからないからということでもありません。それは、私が常にどのように見えるかでカテゴライズされ、”他者”にされ続けてきたからです。

「どこの出身ですか？」
「本当の出身地は？」

善意からの、一見害のないこの質問を、私は生まれてこのかた、何度も訊かれてきました。時には1日に何度も。その問いが自分のアイデンティティとは何かを疑わせ、葛藤を引き起こしました。自分がどこに、どのように所属しているのか、疑問を持つようになりました。訊かれるたびに、どうやら私には居場所がないのではないかと思うようになりました。

地元はどこかと聞かれれば、答えはあります。
何をやっているのかと聞かれたら、答えられます。
好きな食べ物を聞かれても、答えられます。

私は自分がどう考え、行動し、どのように人と関わるかで自分を定義しています。
それこそが、私を私たらしめているからです。

ア・パス・トゥ・ウェア 道の果ては
アルヴォ・ペルト：アリーナのために

アルヴォ・ペルトの《アリーナのために》は、私の人生の中で最も傷つき、脆かった一時と結びついています。

3歳で初めてピアノの音色を聴いた時、弾いてみたいという願望が芽生えました。音楽家になりたかったのです。長い年月の間には、疑問や不安を経験したのは確かですが、音楽で生きていくことに導かれた自分の道を、問われる瞬間が来るとは思いもよりませんでした。

3年前から、自分でも驚くような身体的な症状が現れ始め、微細運動機能に影響が出たため、演奏能力に支障をきたすのではないかと恐れを感じました。数か月にわたる診察や検査、入院を経て、ついに多発性硬化症と診断されました。

診断が下ったまさにその日、私は故郷のミュンヘンで、前作『ナイトフォール』のプログラムでリサイタルを行いました。ショパンのノクターン第48番ハ短調の演奏中に、しびれと痙攣を感じはじめ、最終的には左腕のコントロールを失いました。生まれて初めて、演奏を中断せざるを得なくなったのです。その瞬間、私が舞台の上で経験した時空の静止は、あのハ短調という調性と相まって、私の心を離れることはありません。

その時から2年を経て、素晴らしい医師や自分に合った治療法と出会い、現在は無症状で過ごしています。今現在、多発性硬化症は完治する病気ではありませんが、私はこの症状による制限を受けてはいないと、自信を持って言えます。

自分自身への信頼と自信を取り戻す方法を探るのは、過酷な道程でした。自分が置かれた新しい状態を理解し、身体が発する信号に耳を傾け、読み取ることは今後も続きます。

未知の空間に一歩一歩足を踏み入れていく、マインドフルネスというものがあります。
自分たちの内奥に深く入り込み、耳を澄ませ、意識を集中させるのです。
心と体が時として求める意識に・・・。

アルヴォ・ペルトの、脆く、繊細なこの作品には、そのすべてが完璧に捉えられています。

ララバイ・トゥ・エターニティ 永遠（とわ）への子守歌
アリス＝紗良・オット：ララバイ・トゥ・エターニティ
（モーツァルト：《レクイエム》“ラクリモーサ”より）

ショパンの最期の前奏曲は、決定的な憤りと苦悩に終始しています。それに呼応するエピローグを見つけたいと思いました。もっとオープンで無限な。

モーツァルトの“ラクリモーサ”は、彼が人生の最期に作曲して未完に終わった《レクイエム》の一部です。この音楽の中では、死すべき命は不死へと変わり、限りあるものが永遠となります。

私の編曲では、その断片を遠くにこだまさせています。それは答えのない問いのための空白に満たされているのです。

アリス＝紗良・オット
（訳：江口理恵／編集：ジャパン・アーツ）

【2022年 日本公演スケジュール】

5月20日（金）	【倉　敷】倉敷市民会館ホール　［主催］倉敷市、倉敷市文化振興財団
5月21日（土）	【大　津】滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール　［主催］滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール
5月23日（月）	【高　岡】富山県高岡文化ホール　［主催］富山県高岡文化ホール音楽友の会
5月26日（木）	【仙　台】電力ホール　［主催］tbc東北放送
5月27日（金）	【名古屋】愛知県芸術劇場コンサートホール　［主催］中京テレビ放送／企画・運営：中京テレビ事業
5月29日（日）	【所　沢】所沢市民文化センター ミューズ アークホール　［主催］(公財)所沢市文化振興事業団
5月30日（月）	【東　京】サントリーホール　［主催］ジャパン・アーツ

協力：ユニバーサル ミュージック